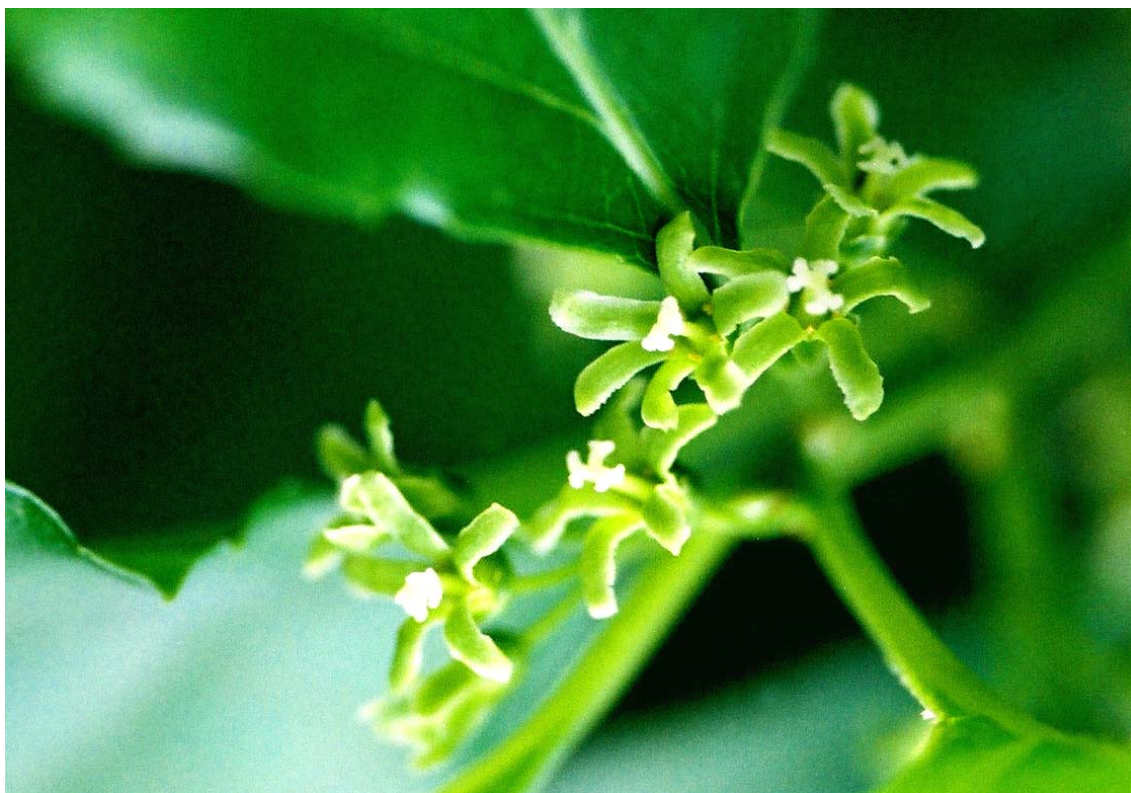


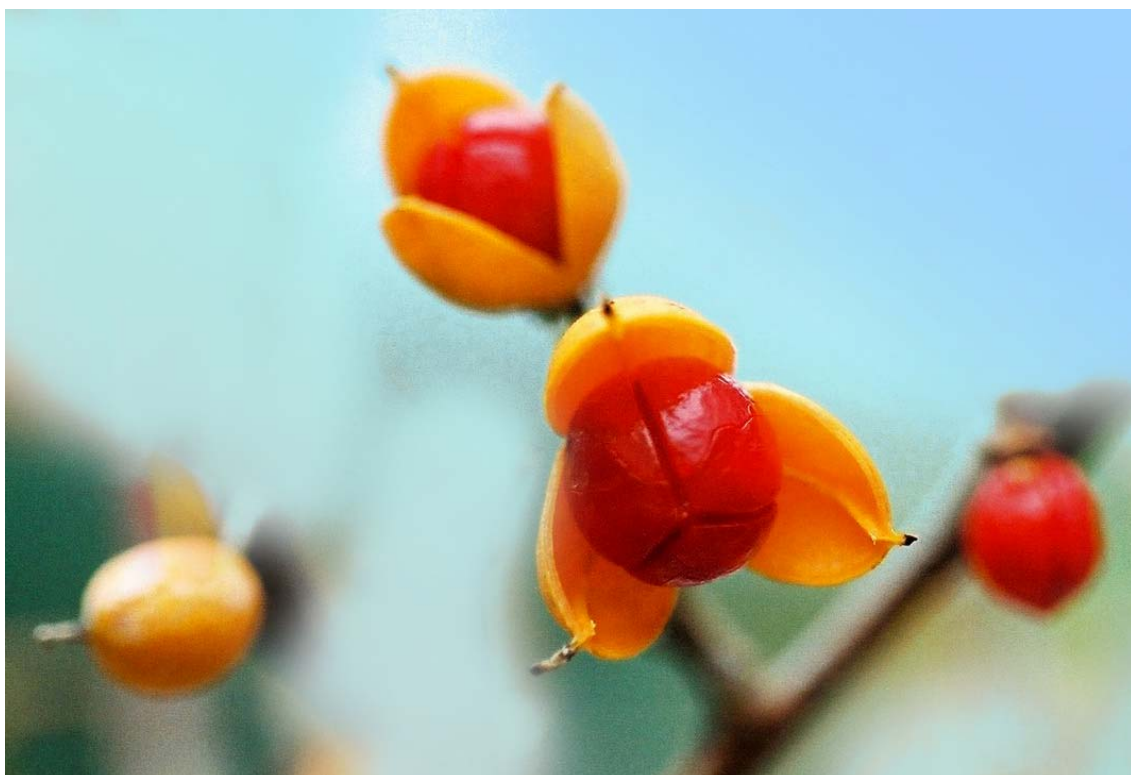
## 6) ツルウメモドキ=蔓梅擬

ツルウメモドキはニシキギ科のツル性落葉低木で、北海道から本州、四国、九州、沖縄、朝鮮、中国の山野に自生し、実が美しいため庭木としても植えられる。葉柄を持つ葉は互生し、長さは 5~10cm 円状に近い楕円形で、先は急に尖り縁には鈍鋸歯がある。雌雄異株で初夏、葉腋から花柄を出し 10 個前後の黄緑色の小さな 5 弁花をつける。果実は径 6~8mm の球形で黄褐色をしており、熟すと三裂して中から朱赤色の種子を露出する。和名の由来はツル性のウメモドキという意味だが、分類的には違う仲間である。学名は『*Celastrus orbiculatus*』で、属名は西洋キズタの古代ギリシャ名、種小辞は円形の意味である。漢方では近縁のキツルウメモドキのことを『南蛇藤』(ナンジャトウ)と呼び、風邪薬にしている。1709 年の『大和本草』には「蔓梅もどき<中略>実は冬熟して、まゆみの如く、殻<sup>ハ</sup>黄に、実<sup>ハ</sup>紅にして、鑑賞すべし」と記している。またマユミも同じ仲間である。

アイヌ人はツルウメモドキのことを『ハイプンカル』と呼び、この蔓の繊維を利用して『ラウンクッ』(下紐)を編んだ。アイヌの女性たちは『フチイキリ』という血縁集団を組織しており、同一集団では同じ編み方で作った下紐を、同じ巻き方で腰に巻くものとされていた。下紐はツルウメモドキの繊維を編んだ細紐を数条巻いたもので、その形と編み方は母から娘へ、娘から孫へと受け継がれた。結婚や出産、葬儀などの手伝いも同じフチイキリの者が行ない、血縁集団の強い連帯感で結ばれていた。しかしこの下紐は夫にも見せることのできないものとされ、男性は自分の母親と同じ下紐の女性との結婚は認められなかった。近親結婚を避けるための不思議な絆ではある。女子のフチイキリに対して、男子の集団を『エカシイキリ』といい、『イナウ』などにつける『イトクバ』(祖印)を共通にしていた。財産や熊穴などの狩猟場や様々なものの相続もこれに従って行なわれた。男子が成人になると、父方の系統を表す『エカシイトクバ』(祖印)の刻み方とその扱い方を、父または祖父から教えられた。因みにイナウとはアイヌが祭礼に用いる祭具の一つで、直径 3cm 長さ 70cm ほどの木で作られており、日本の神社で用いる幣(ミヅケラ=01-04-08 コブシの項参照)に似た形状のものである。神と人間の間を結ぶ道具の一つと考えられていたが、幣が祭道具に近かったのに対して、イナウは神への供物としての色彩が強かった。このため丁寧に削り出され、通常はヤナギの木(アイヌ語ではスス=03-04-12 ヤナギの項参照)が用いられた。しかしアイヌでは木肌が白いミズキ(アイヌ語ではウトウカンニ=02-03-01 ミズキの項参照)は天界では銀に変わり、木肌が黄色いキハダ(アイヌ語ではシケレペニ=06-03-07 キハダの項参照)は金に変わると信じられていた。従ってイナウ作りはアイヌの男たちの大事な仕事の一つとされ『イヨマンテ』(熊祭り)や『チセノミ』(新築祝)など、アイヌにとって重要な儀式においては、大量のイナウが必要となり、イナウ作りに多くの時間を費やすこととなったのである。



ツルウメモドキの花はよほど注意してみないと見落としてしまいそうな緑色の目立たない花である。しかし果実の季節になると、俄然人の目を集めるが、雌雄異株である(埼玉県所沢市)。



ツルウメモドキの果実を拡大してみると、こんな愛嬌のある顔である…(埼玉県深谷市)。



赤い種子が現れたツルウメモドキの果実。若い果実は緑色だが、次第に黄色実を帯び、完熟すると種皮がはじけて、中から真っ赤な実が顔を覗かせる(さいたま市緑区)。



種皮が裂けて赤い実が現れるのはニシキギ科の特徴である(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)